日本政策金融公庫。農林水産事業 情報戦略レポー



Report on research

上半期・通年見通し プラス維持も低下 労働力不足により 設備投資の意欲増

-2017年上半期 農業景況調査 —

日本公庫の農業資金をご利用いただいているお客さ まを対象に、2017年上半期農業景況に関する調査

られます。

況感は続いていると言えそうです。

業種別では、畑作(▲一七・六→

下や出荷時期と需要期のずれなど

-の上昇、天候不順による品質の低

を行いました。結果概要をご紹介します。

| 方、施設野菜 (二六·三→八·九)

移しました。

景には光熱動力費などの生産コス 景況DIは大幅に悪化しました。背 施設花き(一一・八→▲二二十二)の

の最高値三・六を更新し、一二・二ま で上昇していることから、総じて好

全体で低下も投資意欲強い

果樹(二五・六→二四・八)、茶(一一・ 風被害からの回復を反映したと見 ました。これは一六年の北海道の台 菜 (一四・七→一七・○) は堅調に推 けて順調に生育が推移した露地 六·○)の景況DIが大幅に改善し 一→一三・八) や、春先から七月にか 一六年に続き販売単価が好調 ました。 四・九→▲一・一)、都府県(二三・六 りそうです。キノコ(一・一→▲一八・ 未収穫とあって慎重な見方となり →四・六)ともに、調査時では多くが 化しました。また、稲作は北海道 九) も販売単価の下落で大幅に による販売単価の下落の影響があ

六・二→四五・一)、ブロイラー 七·四→四四·九)、採卵鶏(四 府県:五二・二→三○・二)、養豚 →三二・七)のDI値が高い水準に (北海道:五七・六→四五・一、 畜産では、販売単価の 好 (調な酪

[DIの値とお天気マークの関係]

ていること、設備投資DIは一六年 りDIのいずれもプラス値を維持し

図1

経営部門

農業全体

稲作

(北海道)

稲作

(都府県)

畑作

露地野菜

施設野菜

果樹

施設花き

キノコ

酪農

(北海道)

酪農 (都府県)

肉用牛

養豚

採卵鶏

ブロイラー

畜

耕

ものと思われます(図2)。

農業景況天気図

なお、景況DI、収支DI、資金繰

)、その結果、景況DIが悪化した ○·○、資金繰り:一五·五→九

九・一→▲二○・九)を背景に、収支

→○・四)と生産コストの上昇

これは、販売単価の低下(二六・

2017年

上半期実績

*

12.0

▲1.1

4.6 **

6.0

17.0

8.9

13.8

☆

24.8

""

▲22.2

1

▲18.9

\$

45.1

☆

30.2

9.8

潦

45.1

\$

32.7

\$

44.9

7

 \mathbf{k}

7

 \rightarrow

 \mathbf{k}'

7

 \rightarrow

V

V

 \mathbf{k}

7

L'

7

L'

7

 \mathbf{k}

7

 \rightarrow

 \mathbf{k}'

7

7

7

V

 \mathbf{k}

資金繰りが悪化し(収支:一六・七一

2016年

実績

*

20.0

▲4.9

☆

23.6

1

▲17.6

14.7

\$

26.3

11.1 **☆**

25.6

11.8

1.1

\$

57.6

☆

52.2

☆

50.3

冷

26.2

☆

40.8

☆

27.4

ト低下し、

一二・〇となりました(図

一六年の二○・○から八・○ポイン

農業全体の景況感を示す景況DI

一○一七年上半期(一~六月)の

、調査開始以来の最高値となった

2017年

通年見通し

3.3

1

▲19.0

▲4.7

*

12.0

7.7

*

12.6

12.1

11.0

1

▲12.1

4.0

☆

24.6

20.0

1

▲17.4

☆

34.4

3.9

\$

29.4

(注) DI値に2.5以上の差異がある場合は上向きまたは下向き矢印。2.4以内の場合は平行矢印。

九・八) は素牛価格が高値基調の中 あります。一方、肉用牛(五○・三→ に悪化しました。 完単価が下落したことから大幅

通年見通しは天候不順が影響か

不順 と見られます。 その影響が下半期も続くとの判断 ト低下し、三・三となりました。天候 六年の二○・○から一六・七ポイン 一〇一七年通年の見通しDIは、 が作物に大きな影響を与え、

半の業種で悪化し、施設野菜(二六) ナスに転じる見通しです。 などを見通して大幅に悪化し、マイ (一・一→▲四・○)、施設花き(一一・ 用牛(五○・三→▲一七・四)、キノコ 府県:五二・二→二〇・○)、採卵鶏 農(北海道:五七・六→二四・六、都 ○)、露地野菜(一四·七→七·七)、酪 三→一二・六)、果樹(三五・六→一一・ 八→▲一二・一) は販売価格の下落 (四○・八→三・九)となりました。肉 見通しDIは、一六年と比べて大

の▲三四・六となりました。

Ⅰは一六年(▲三三・六)から横ば

改定(大豆平均交付単価 悪化しています。また、水田転作で 不透明なことから見通しは大幅に ○、都府県:二三・六→▲四・七)は 大豆作を行っている経営体におい 「査時に天候不順が続き、 畑作物の直接支払交付金の (北海道:▲四·九→▲一九 一四~一六 、生育が

調査対象

スーパーL資金/農業改良資金

|万一三| 五先)

五一一六先(回収率二四・〇%

有効回答数 融資先(計

*」グラム)や大豆販売単価下落の影 体として注視が必要です。 →一七~一九年:九〇四〇円/六〇 年:一万一六六〇円/六〇㌔グラム 響が考えられ、稲作経営は経営総

らの回 り、横ばいで推移しています。 なっています。また、販売価格の下 七・四→二九・四)、一六年の台風か 七・六→一二・○)は改善の見通しと 六・二→三四・四)、ブロイラー 一) は底値をついたとの見方が広が 落が続いていた茶(一一・一→一二・ また、一七年上半期の雇用状況D 方、販売価格が好調な養豚 [復が見込まれる畑作(▲一

不足を補うとの声が多く寄せられ 資による生産性向上を図り労働力 日本公庫には生産者から、設備投 な労働力不足の状況が続いており、 他産業との競合などから、 深

収支DI、資金繰りDI、販売単価DI、生産コストDIの推移

情報企画部

淺野

真宏

【調査概要

調査時点・方法

二〇一七年七月·郵送調査

		収支DI		資金繰りDI		販売単価DI		生産コストDI	
		2016年	2017年	2016年	2017年	2016年	2017年	2016年	2017年
	農業全体	16.7	10.0	15.5	9.1	26.1	0.4	▲ 19.1	▲20.9
耕種	稲作 (北海道)	▲ 13.7	一 (注)	▲2.5	▲ 7.1	19.9	一 (注)	▲24.2	▲24.8
	稲作 (都府県)	23.8	— (注)	13.5	2.5	33.4	— (注)	▲ 11.5	▲13.4
	畑作	▲ 24.7	一 (注)	▲3.3	6.3	▲3.5	一 (注)	▲32.6	▲23.4
	露地野菜	13.1	8.2	14.2	9.7	16.5	▲ 2.6	▲28.9	▲32.0
	施設野菜	20.3	▲2.9	19.8	4.8	26.0	▲ 24.1	▲26.5	▲32.3
	茶	8.1	6.9	4.3	4.3	▲ 1.3	12.5	▲11.1	▲24.1
	果樹	19.3	30.7	14.7	16.2	34.9	31.3	▲31.3	▲31.8
	施設花き	9.1	▲ 20.0	7.3	▲ 13.6	7.3	▲ 40.0	▲21.9	▲46.5
	キノコ	▲ 1.0	▲ 11.4	1.0	▲ 14.8	▲ 18.2	▲ 50.0	▲22.4	▲25.6
畜産	酪農 (北海道)	57.0	31.6	45.7	34.9	79.3	64.6	▲ 4.9	▲22.6
	酪農 (都府県)	48.4	21.8	42.1	26.6	50.7	18.8	▲0.7	▲8.1
	肉用牛	48.6	▲ 4.3	34.6	11.8	76.4	▲ 16.0	▲37.3	▲25.3
	養豚	19.1	40.9	32.4	42.4	▲15.1	49.0	16.9	11.3
	採卵鶏	44.8	28.6	44.8	34.7	▲ 12.0	▲11.1	11.2	3.0
	ブロイラー	29.1	15.0	29.1	34.5	▲9.7	23.1	▲ 4.8	▲ 13.8

(注)水稲および畑作は、調査時では多くが未収穫のため、調査していない。

[DIについて]

[●]天気図はDI (Diffusion Index) と呼ばれる指標により作成。

アンケートの各項目への回答は、「①良くなった ②変わらない ③悪くなった」から一つ選ぶ形式となっており、前年と比較して「良くなった」の構成比から「悪くなった」の構成比を差し引いたもの。

トマトの消費動向

鮮度と価格を重視

トを捉えていることがうかがえま

to Eat」食品として、生鮮トマ

五%、「ほとんど食べない」一七 数回」二二・八%、「ほぼ毎日」二〇 多回答となりました。次いで「月に ところ、「週に数回」三九・六%が最 場合も含む)を食べる頻度を聞いた トマト(トマトを家庭で調理した

念される肉用牛経営について、それ た素牛価格の高騰などの影響が縣 て注目されるトマト作について、ま 「生鮮トマトと牛肉の消費動向」に 近年、高収益農業経営の一つとし

ことが分かりました(図1)

ました (図4)。

種)、輸入牛肉という種類別に聞き

ぞれ商品の消費動向を知ることで ついて調査しました。 経営の材料になることを目的に

割前後となりました。一方で、「ブラ ○・二%、「味・食感」三八・二%と四 次いで「価格」七〇・八%、「産地」四 は「鮮度」が七四・八%と最も高く、 トマトを購入する際のポイント

生鮮トマトは 「Ready to Eat」食品 牛肉は赤身肉の 購入機会が増加

2017年度上半期 消費者動向調査

前項では「2017年上半期農業景況調査 | を掲載して ありますが、ここでは「2017年度上半期消費者動向 調査|にて農産物の消費動向がどのように変化して

結果をご紹介します。

野菜、畜産物を代表し、トマトと牛肉についての調査

ことが分かります。

ンド」八・九%、「機能性(高リコピン

か。まず赤身肉と霜降り肉につ

三・四%、「サラダ」が七一・六%と七 べられる手軽さ、いわゆる「Readv と二割以下にとどまっています。 は、各一八・八%、一六・一%、八・五% 鍋」「サンドイッチ」「自家製ソース 割を超える一方で、「炒め物・煮物 いたところ、「そのまま食べる」が七 消費者は、洗うだけでそのまま食 次に、トマトを消費する形態を間

一%の順となりました

計からの支出額について、八割超は 消費者のシビアな一面がうかがえ のの、支出額そのものは現状維持と しい品種、ブランドに興味はあるも にとどまりました(図2)。 「現状のまま」、「増やしたい」は一割 このことから、高糖度トマトや新 その一方で、今後のトマトへの家

牛肉の消費動向

購入志向が変化

牛肉の消費動向はどうでしょう

格を許容する消費者は一定層いる ランドは三五・九%となり、高い価 マトで五五・八%、新たな品種やブ してみたいという階層は高糖度ト きました。その結果、割高でも購入 と思う価格帯は、どの程度かを間 の商品を消費者が購入してみよう ブランド化が進んでいます。これら は「鮮度」と「価格」を重視している など)」四・三%と一割以下となりま した。このことから、トマトの購入 産など新たな品種の開発や産地 現在、高糖度や機能性トマト 新商品の購入意欲 されてきた黒毛和種などの四品 した(図3)。 四・五%と四・四ポイント上昇しま り肉を購入することもある」が四 身肉を購入することが多いが霜降 年前との比較で聞いたところ、「赤 て、その購入頻度について現在と五 産牛肉(ホルスタイン種などの乳用 種などの乳用種を交雑した牛)、国 種)、交雑牛肉(和牛とホルスタイン 傾向が強くなっています。 り、霜降り肉よりも赤身肉を好む も二四・○%とわずかに上昇してお (日本で長い時間をかけて品種改良 また、「常に赤身肉を購入する」 次に、牛肉のイメージを和牛肉

の牛肉よりも高くなりました。 五・一%、「脂っこい」一九・四%が他 輸入牛肉は「さっぱりしている」 ○ポイント以上高くなりました。 い」五七・六%が他の牛肉に比べ一 「価格が高い」五九·○%、「軟らか 和牛肉は「おいしい」八五・三%、

なり、和牛を割高と感じている人が が妥当の回答が他の牛肉より高く 妥当」が五割を超えました(図5)。 産牛肉、輸入牛肉は「現在の価格が 方で、和牛肉については「値下げ」 牛肉の価格水準は、交雑牛肉、



查結 findings/ ホ 今回ご (https://www.jtc.go.jp/n. 果に関 一紹介した内容を含む本調 、ージに掲載しておりま する公表資料は、当公

和牛肉

交雑牛肉

国産牛肉

輸入牛肉

図4 牛肉のイメージ (複数回答可)

19.5

16.4

15 2

////////////// 21.1 13.0

15.6

14.1 15.8

15.4

14.1 21.9

15.1

10.1

29.4

6.5

0.1

1.0

0.9

10.9 9.9

12.1

11.8

19.4

20

25.1

30

ケー

計が一致しない場合があります。]図については、四捨五入の関係上、 合

調査方法:インターネットによるアン 実施時期:二〇一七年七月 の男女二〇〇〇人(男女各一〇〇〇人

55.0

59.5

調査概要

めているという見方ができると思

(情報企画部

五十嵐

拓

85.3

おいしい

栄養価が高い

カロリーが高い

さっぱりしている

90

100

(%)

//// 軟らかい

//// 価格が高い

■脂っこい

その他

70

60

視しつつも、

よりおいし

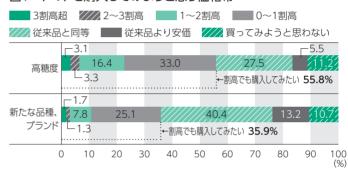
いものを求

このことから、消費者は価格を重

りました。 したいという

調査対象:全国の二〇歳代~七〇歳代

図1 トマトを購入してみようと思う価格帯



回りました。

減らしたい

が

やしたい

」を上

その一方で、

その 増

他 0)

り牛肉で

は

りました。

特に輸入牛肉を減 ·回答が他より多く

たい」七・〇%を一一・六ポイント

種類別に聞いたところ、

、和牛肉 「減らし

さらに、今後の牛肉への支出

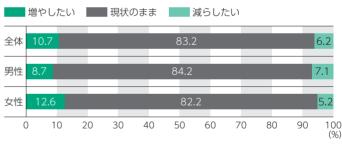
額を

増やしたい」一八・六%が

ています。

他の牛肉に比べて多い結果となっ

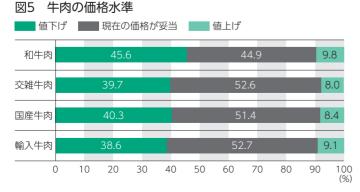
今後の生鮮トマトへの家計からの支出額



2.9

10

0



44.0

赤身肉と霜降り肉の購入頻度 図3 (%)

